

届け 世界の果てまでも

令和3年11月30日
No. 47
文責 校長 飯久保一男

今日、誕生日なの

毎朝、主幹教諭がその日の予定などを放送で連絡しています。放送の中で、その日が誕生日の子どもを「今日の主人公」と称して紹介しています。

玄関にある、主幹教諭作成の11月生まれの子どもたちの名前の掲示です。→明日には12月生まれの子の名前に変更されます。 ※わざとぼかしてあります。



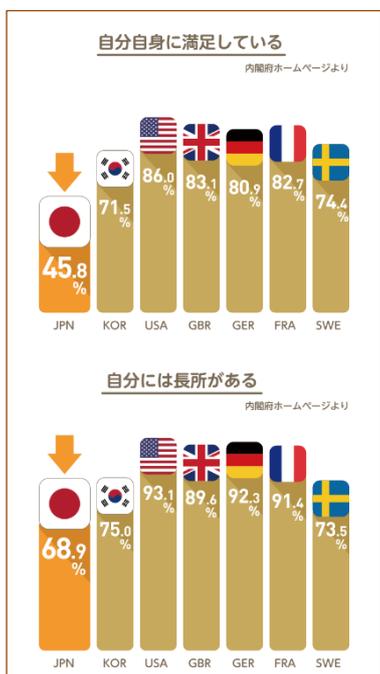
朝の放送で「今日の主人公」と紹介された子に、そのあと出会ったときは「今日、誕生日だね」と声をかけることがあります。また、校長室にやってくる子、廊下などで出会った子の中には、「校長先生、私、今日、誕生日なの」とか「ぼくは明日、誕生日なんだ」と話してくる子どもたちもいます。

子どもたちは誕生日が大好きです。もちろん、プレゼントをもらえるから、ごちそうやケーキが食べられるからなどという「物」的な喜びがあると思います。そしてそれ以上に、主幹教諭の言葉通り、誕生日は「主人公になれる日」であり、親から全面的にほめられる日だから大好きなのだと思います。

子どもをたくさんほめていることと思います。でも、ほめるときって、何かをがんばった、お手伝いをしたなどの「条件付」でほめていませんか？ 子どもを「無条件」でほめることってありますか？

子どもたちにとって、「無条件」で親にほめてもらえる唯一の日が誕生日なのかもしれません。だから、子どもたちは誕生日が大好きで、待ち遠しいのだと思うのです。

母の日の前に、本紙面No.7（本校ホームページで見ることができます）に、母の日も子どもの誕生日も「母に感謝する日であってほしい」と書きました。また、「子どもが誕生日を迎えると、その子が産まれたときのことを思い出すのではないかと」も書きました。子どもの誕生は、人生の中でも最大の喜びであったことと思います。産まれてきてくれてありがとうと「無条件」で喜んだことと思います。



昨年も書きましたが、内閣府は令和元年版「子ども・若者白書」で、先進諸国に比べて、日本の子どもの自己肯定感が低いという調査結果(左グラフ)を発表しています。

日本の子どもの自己肯定感が低い理由の一つが、「無条件」でほめることがあまりないことにあるのではないかと考えるのです。我が子に

「あなたはそのまま十分だよ」「今のあなたが大好きだよ」

と言ってやれることは、子どもへの親の最大の支援となります。ところが、私もそうなのですが、日本人はこういう言葉を口にするのが苦手です。そのチャンスが、子どもの誕生日だと思うのです。

- 懐妊を医者に知らされたときのこと
- 懐妊を家族に伝えたときのこと（特に父親の反応を、また祖父や祖母の反応など）
- お腹の中で初めて動いたときのこと
- そして、産まれたときのこと などなど

を話してあげることが「無条件」でほめることにつながると思います。

「そんな“無条件”でほめていたら、子どもが勉強とかお手伝いなどを返ってやらなくなるんじゃないの」と心配する方もいるかもしれません。大丈夫です。逆に、親から「無条件」に丸ごと肯定してもらえると、子どもの心は常に安定します。そして、自己肯定感が高まり、がんばるエネルギーがわいてくるものです。親の「無条件」の愛情を実感できている子は、家族や友だちにもやさしく接する子どもになります。

「今年の誕生日はもう過ぎちゃったよ」という声も聞こえそうです。「無条件」にほめることはいつでもできますが、冬休みに家族で過ごす時間をチャンスとしたらどうでしょう。クリスマスに、子どもが生まれたときの喜びなどを書いた手紙を贈るのは、「物」以上に素敵なプレゼントかもしれません。



「またね！」

「もうすぐおばあちゃんのお誕生日だから、ビデオ電話してみようか」
我が家では「オンライン里帰り」がちょっとした楽しみになっている。



お互いの顔がスマホの画面に映ったとたん、
子どもたちは歓声を上げてパチパチと拍手で大喜び！
最初はちょっと照れたような表情だった夫の両親もだんだんと笑顔が大きくなっていく。
今はこんな何気ない会話のやりとりこそが楽しく感じる。

「そろそろお祝いしましょうか。」

ケーキはそれぞれの家で用意することになっていた。

「ああ、おいしい。ほんとに一緒に食べているみたいね。」

お義母さんの一言にうなずきながら頬張った。

ひとしきり盛り上がったところで、今度は大人同士で互いの近況を話した。

「お買い物は行けてますか？ 不自由はないですか？」

「大丈夫よ。でも美容院には行けてなくて。ちょっと長い髪もいいかなって楽しんでるわ。」

先ほどまで相手を崩していたお義父さんが表情を引き締めて言った。

「みんな、くれぐれも手をちゃんと洗ってな。マスクも忘れずにな。」

心から案じてくれているのがスマホ越しに伝わってきた。



ビデオ電話を終えるときは、いつも思いっきり手を振り合う。

「またね！」

「またね。早く会いたいね！」

エールのように「またね」が響き合い、

私たちは明日からの元気をもらうのだった。

花王「暮らし百景」より

東京に住む長男夫婦は、コロナ禍で結婚したために、長男の嫁はまだ我が家に来たことがありません。

今年の年末年始は、現在の感染状況では、オンラインではない「里帰り」ができるでしょうか。

「孫の嫁に会いたい」と、我が家への「里帰り」を私の母が首を長くして待っています。

